ｓＩＬ－２Ｒ測定試薬の性能評価

◎竹中 ともみ[1)]、雫石 宏美[1)]、大久保 千怜[1)]、田口 俊彦[1)]
八戸赤十字病院 医療技術部 検査技術課[1)]

【はじめに】可溶性インターロイキン-2 受容体（以下 sIL-2R）はＴ細胞活性化の指標であり、非ホジキンリンパ腫や成人 T 細胞白血病の診断補助・治療効果・再発の判定に有効であるとともに、自己免疫疾患や感染症などの炎症マーカーとして高値を示すため、臨床で広く用いられている。今回、汎用生化学自動分析装置で測定可能なラテックス免疫比濁法（LIA 法）試薬が発売され、基礎的検討を行ったので報告する。

【方法】測定機器：TBA-c8000（キャノンメディカルシステムズ）、検討試薬：ナノピア IL-2R（積水メディカル）、検討内容：正確性、再現性、希釈直線性、共存物質の影響、他法との相関性

【結果】①正確性：4 濃度のキャリブレータを試料として 3 重測定した結果、理論値を 100%とすると 99.2～101.3%であった。②同時再現性：2 濃度の精度管理用試料を連続 20 回測定した結果、CV は 0.7～2.3%であった。③日差再現性：2 濃度の精度管理用試料を 15 日間測定した結果、CV は 0.9～2.6%であった。④希釈直線性：高濃度検体を 10 段階希釈した結果、9255U/mL まで直線性が確認できた。⑤共存物質の影響：干渉チェック・ A プラス（シスメックス）を用いて検討を行い、ビリルビン F：19.1mg/dL、ビリルビン C：21.2mg/dL、溶血ヘモグロビン：490mg/dL、乳び：1610FTU まで影響が認められなかった。⑥相関性：対照として BML-EIA 法での測定値を x、ナノピア IL-2R での測定値を y として検討した。相関（n=150）は、回帰式 y=0.878x+58.0、相関係数 r=0.996 であった。

【考察】検討の結果、基礎的性能は良好であり、院内実施は十分可能であると考える。現在当院では sIL-2R の検査は外部委託のため、結果報告までに数日を要しているが、今後本試薬を院内導入することで、早急に治療が必要な症例において迅速な結果報告が可能となる。また、委託件数が比較的多い項目であり、院内生化学検査用検体での測定が可能となれば、採血本数削減と患者の負担軽減に繋がる。したがって、本試薬の院内導入は診療に大きく貢献できると考える。

連絡先 0178-27-3111（内線 4313）